

本学における実習指導教員研修会の実績と今後の在り方

只浦 寛子¹⁾、菅原よしえ¹⁾、小野 幸子¹⁾

キーワード：実習指導教員研修会、看護学実習、臨地実習指導、看護教員

要 旨

看護学実習は看護教育の根幹をなすものであり、臨地実習における教育的役割の資質向上に向けて、担当教員が恒常的に研鑽していくことは重要なことである。本研究では、研修会の今後の在り方を考察することを目的とし、平成16年度から平成21年度の実習指導教員研修会報告書アンケート結果をデータに、質的帰納的に分析した。研修会は、多面的に高い意義があり、中長期的に評価検討しながら継続していく必要性があると考えられる。把握された課題をもとに組織全体の教育的好循環を一層高めていくことが必要である。

Analysis and Recommendations for the Nursing Practicum Workshop at Miyagi University

Hiroko Tadaura¹⁾, Yoshie Sugawara¹⁾, H Sachiko Ono¹⁾

Key words : A Workshop for Instructors involved in Nursing Practicum, Nursing Practicum, Training in Clinical Nursing, Nursing Education Supervisors

Abstract :

The Nursing Practicum Workshop is a basic unit for dispensing nursing education. The workshop plays an important role in defining and improving the educational role that nursing instructors must perform in actual clinical nursing settings. In the present study, we aimed at discovering the ideal coursework for future workshops for instructors already enrolled in the Nursing Practicum course. To accomplish this, we analyzed the responses to the questionnaire for the Nursing Instructor Workshop recorded from 2004 to 2009 and studied the data available for qualitative induction. We found that the workshop was extremely beneficial, multifaceted (including education from important subject areas), and thereby significant to the nursing profession. It was therefore considered that the workshop was necessary for continued evaluation of the nursing profession and in examining its short and long term objectives. Further, it is recommended that the practicum be placed under a system within the School of Nursing for ongoing evaluation and change in response to regular analysis of participant feedback.

1) 宮城大学看護学部 (Miyagi University School of Nursing)

はじめに

保健医療技術者の国家試験取得を目指す学生の専門職としての知識・技術・態度等の教育指導の資質向上に向けて、臨床実習はその質・量ともに看護学部・学科教育の中でも重要な位置づけにある¹⁻²⁴⁾。教えるものを育む実習指導教員研修会は、教育活動の質の向上を図るために全国の看護大学等で広く実施されており、中には宿泊研修、臨床側の看護師との合同研修実施に関する報告もなされている²⁵⁾。本学でも、実習指導教員研修会は、平成14年度以降継続的に実施されてきているが、目的や対象、研修会の意義や在り方に関し、その詳細を検討した報告はなされていない。本研究では、本学の実習指導教員研修会報告書にある研修終了後のアンケート結果の詳細を検討し、本学の実習指導教員研修会の今後の在り方を考察することを目的とした。

宮城大学看護学部実習指導教員研修会

宮城大学看護学部の実習指導教員研修会は、実習指導の基本と実習指導教員の在り方等について理解することを目的に、平成14年度より実施されている(表1)。平成16年度および17年度実習委員会所掌業務資料によると、実習委員会では、実習指導体制において、指導力強化を目的とし、表2にある事項が平成14年10月の実習委員会にて確認されたことが記述されている。

平成14年度以降、実習委員会担当者らは毎年、実習指導教員研修会の企画・運営を担い、実習指導教員研修会の開催数は、平成22年度で第9回を数える実績となっている。本研修会の対象は、表2では助手及び実習指導担当教員を対象とするとされているが、表1から実際の開催状況をみると、平成15年度以降グループワークメンバーおよびレポート提出者は助手(平成16年度以降は助教)が対象とされてきている。

平成22年5月の実習委員会及び運営会議資料では、この理由として初年度平成14年は、“助手を中心とする実習指導担当教員”を対象として実施していたが、ファカルティがいることで助教(当時、助手)が自由に発言できなくなることを考慮し、助教が自由に発言できる企画運営(助教を主な対

象者とし、1グループ1-2名の実習委員がファシリテーターとなる)に形を変えていった経緯があることが確認されている。

平成19年3月に作成された本学の自己点検評価資料123頁には、「看護学実習は看護教育の根幹をなすものであり、臨地において、大学で学んだ講義・演習内容と実践とを関連づける教育的役割を果たすためには、担当教員が恒常的に研鑽していく必要があることから、平成14年度から助手を中心とした看護学実習担当教員の研修を実施しており、平成15年度以降の研修会からは、結果を報告書としてまとめている」ことが記載されている。また、この平成19年自己点検評価資料には、実習教員研修会は、毎年、研修の開催および助手の定着により教育技術も向上しているが、研修内容はグループワークが多く、継続的な内容となっていないため、系統的な学習を希望する教員も増えてきていることが報告されている。この状況を踏まえ、平成17年度の研修では、はじめて外部の講師による研修会を開催し、好評であったこと、今後は、厚生労働省で実施している看護教育研修会や実習指導者研修会等の教育プログラムを参考とし、継続的・系統的な研修を企画する必要があることが課題として記載されている。

方 法

実習指導教員研修会報告書が作成されている平成15年度から平成21年度の7年間の報告書のうち、アンケートを実施した平成16年度から平成21年度の実習指導教員研修会報告書アンケート結果をデータに、質的帰納的に分析した。記述内容を精読し、一意味一文として、それらの意味内容の類似性に基づいて小分類、大分類と抽象度をあげて分類した。大分類は【 】, 小分類は〔 〕、記述内容は「 」とした。また、記述のあった年度には○印をつけて表にした。

結 果

1. 講演について

講演に関する記述内容をみると、表3-1に示しているように、良かった、有意義だった理由は【実習指導に役立つ】、【新しい知識を得た】【講演

表1 実習指導教員研修会について（平成14年度～平成21年度）

年 度	平成21年度	平成20年度	平成19年度	平成18年度	平成17年度	平成16年度	平成15年度	平成14年度
日 時	2010/3/16(火)	2009/3/17(火)	2008/3/24(月)	2007/3/23(土)	2006/3/25(月)	2005/3/17(木)	2004/3/23(火)	2002/11/11(月)
時 間	13:00～16:00(3h)	13:00～16:00(3h)	13:00～16:40(3.7h)	13:30～16:30(3h)	13:30～17:00(3.5h)	13:00～16:00(3h)	13:00～16:00(3h)	16:00～16:45(0.8h)
テ ー マ	臨地看護学実習指導における学生指導上の課題と取り組みの実例・場面の検討	臨地看護学実習指導における学生指導上の課題と取り組みの実例・場面の検討	フィジカルアセスメント教育	ケアリングと看護教育	看護学実習における学生の学びを深める教育的な取り組み	「臨地実習における学生指導上の課題と取り組みの実例」①学生理解－学生の成長を支えるための表裏共有について、②臨地実習施設や臨床指導者との連携・調整について	臨地実習における学生指導上の課題と取り組みの実例・場面の検討	本学における臨地実習教育の位置づけ・助手の役割
目 的	臨地看護学実習に関する体験について討議することを通して、学生の学習過程を支援する上での指導の在り方や教員の役割等について理解を深める。	臨地看護学実習に関する体験について討議することを通して、学生の学習過程を支援する上での指導の在り方や教員の役割等について理解を深める。	フィジカルアセスメント教育に関し共通認識を持ち、実習指導上の課題と、実習指導の在り方について考察する。	「ケアリング」に焦点をあてて、学生の学びが深まるための教育的な取り組みについて理解する。また、そのための実習指導のあり方を考察する。	臨地実習における学生の「学び」に焦点をあてて、学生の学びが深まるための教育的な取り組みについて理解する。また、そのための実習指導のあり方を考察する。	臨地実習に関する体験について討議することを通して、学生の学習過程を支援する上での指導の在り方や教員の役割についての理解を深める。	臨地実習における学生指導に関する体験について討議することを通して、学生に学ばせたい内容や指導のあり方、教員の役割等についての理解を深める。	助手及び実習指導担当教員を対象として、実習教育や実習指導に関する研修会や講演会を実施し、指導力の強化を図る。
対 象	グループワークメンバーとレポート提出は助教	グループワークメンバーとレポート提出は助教	グループワークメンバーとレポート提出は助教	グループワークメンバーとレポート提出は助教	グループワークメンバーとレポート提出は助教	グループワークメンバーとレポート提出は助教	グループワークメンバーとレポート提出は助教	助手を中心とする実習指導担当教員
ファシリテーター	実習委員	実習委員	実習委員	実習委員	実習委員	実習委員	実習委員	
講 師	学内講師1名	学内講師1名	外部講師1名	外部講師1名	外部講師1名	－	－	学内講師1名
講 演	1h	0.5h	1.5h	1.3h	1.3h	－	－	0.75h
事例発表	－	－	－	－	－	－	0.7h	－
ディスカッション	－	－	－	1h	－	－	－	－
グループワーク	0.75h	1.5h	1h	－	1h	2h	1.5h	－
全体討議	0.5h	0.5h	0.8h	－	0.7h	0.7h	0.5h	－
アンケート項目	・テーマ ・講演 ・グループワーク ・全体発表 ・今後の研修会への希望要望	・テーマ ・講演 ・グループワーク ・全体発表 ・今後の研修会への希望要望	・テーマ ・講演 ・グループワーク ・全体発表 ・今後の研修会への希望要望	・テーマ ・講演 ・ディスカッション ・その他 ・今後の研修会への希望要望	・テーマ ・講演 ・実習 ・発表 ・研修会に関するその他 ・今後の研修会への希望要望 ・その他	・テーマ ・グループワーク ・全体発表 ・その他(開催時期、時間配分、構成等々) ・今後の研修会への希望要望 ・その他	－	－
実習指導教員研修会報告書	有	有	有	有	有	有	有	無

表2 平成14年度以降の実習委員会所掌業務（平成16年度実習委員会担当者資料）

目 的	助手及び実習指導担当教員を対象とし、実習教育や実習指導に関する研修会や講演会を実施し、指導力の強化を図る
業 務	1) 講義・講演とグループワークを中核とし、適宜組み合わせる実施する講師招聘用として実習委員会から予算申請を行う 2) 講義・講演に関しては、必要時、外部講師招聘用として実習委員会から予算申請を行う

方法が適切であった】の3つに大分類された。実習指導に役立つ内容としては、「具体的ですぐに活かせる指導方法」や「学生を理解する内容」、「教員自身のストレスやメンタルコントロールに関する内容」が良かったものとしてあげられた。特に、「具体的ですぐに活かせる指導方法」については、実習指導に役立つものとして講演が行われた5年

度中、4年度から意見が出されていた。講演は、「理解しやすかった」という意見が3年度出されており、「内容に関わる資料や文献の活用により理解しやすかった」、「講師の経験や信念にもとづいた話しにより理解しやすかった」と評価されていた。一方、要改善点は表3-2に示しているように、【講義内容】、【研修開催時期や時間】、【実習にまつ

る今後の課題】の3つに大分類された。〔具体的な指導方法を知りたい〕、〔新しい知識を得たい〕は、講演が有意義であった理由と同項目であったが、要改善点としても回答されていた。各年度比較のみならず、同じ年度の実習指導教員報告書のアンケート結果をみても、良かった点および改善

点の双方に、これらの意見が出されていた。研修開催時期については、実習終了後ではなく実習中に希望するという意見が出されていた。また〔実習にまつわる今後の課題〕では、講演を聞いて相談室との連携の必要性を感じたという意見が出されていた。

表3-1

講演について

〈良かった、有意義だったと評価された記述内容の分類〉

大分類	小分類	記 述 内 容 の 例	16 年度	17 年度	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	
実習指導に 役立つ	指導方法	とてもわかりやすい内容、かつ身近なテーマで興味を持って聞くことができた。	講演 なし					○	
		(相談室と)連携が図りながら、学生に関わっていくことが重要だと思った。					○		
		具体的で、実習指導にすぐ活かせる内容だったので、学ぶものが多かった。		○		○			
	学生理解	相談室に入室する学生に傾向がわかった。					○		
		宮城大学の学生の状況をデータでみることができ、興味深かった。					○		
		現在の大学生の特徴とさらに看護学生の特徴を理解しやすく説明してもらってとてもよかった。					○		
	教員の自己 コントロール	学生のメンタルヘルスを支えるために教員自身も柔軟な対応ができるようにメンタルヘルスを整えていないといけないことがわかった。							○
		実習では教員自身もまさにメンタルヘルスを求められるので興味深い内容だった。							○
		実習でのストレスの原因が自分でもはっきりせず、もやもやしていたが、ストレスの源を分析でき、すっきりした気分になった。							○
	新しい知識 を得た	教育全般に 関する知識 を得た		教育的、哲学的な視点で考える機会がよかった。		○			
ケアリング・カリキュラムや教育方法としてのケアリングについて学ぶことができた。				○					
フィジカルアセスメント講義の内容が濃く、学生も興味を引くような学習方法だと感じた。					○				
大変勉強になり、これをきっかけに関連図書を読んでいきたい。			○						
メンタルヘルスについて興味を持てた。							○		
講演方法が 適切であっ た	資料がよい	資料が適切であった。	○						
		事前に参考文献を提示して頂けたので、予習して講演を聞くことができた。	○						
	講演の進め 方がよい	現状がわかってよかった。				○			
		理解しやすかった。	○	○			○		
		具体的な数値を示してもらいわかりやすかった。				○			
		経験と信念に基づいた根拠のある内容で理解しやすかった。			○				
	講演時間が 適切	内容にあった十分な時間であった。			○				

表3-2

講演について

〈要改善点として記述された内容の分類〉

大分類	小分類	記述内容の例	16 年度	17 年度	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度
講演内容の改善	具体的な指導方法を知りたい	もう少し具体的な事例を交えてほしかった。	講演なし					○
		実習における指導の実際など具体的内容が聞きたかった。						○
		具体的な指導例をもっと話して頂けるとよかった			○	○	○	
	新しい知識を得た	昨年度の内容と重複する部分が多かった。			○			
		今回初めて受講する人もいるため、前回の復習があってもよいが、新しい知見を得たい。			○			
		発達障害について知らなかったの、今後そのような学生にどのように関わったらよいか知りたい。				○		
	全領域が活用できる内容を盛り上げてほしい	全領域に関する内容が網羅されるとよかった。			○			
研修開催の時期、時間	開催時期を実習中にしてほしい	実習中に聞いたらもう少し活かせると思った。					○	
	講演時間を十分にとってほしい	時間不足だった。		○				
実習にまつわる今後の課題		相談室ともっと連携がとれると良い。					○	

2. グループワークについて

グループワークでは、表4-1に示しているように、良かった、有意義だった項目は【情報共有の機会になった】【適切なグループワーク】の2つに大分類された。【情報共有の機会になった】理由として、〔実習における具体的な指導方法を得た〕、〔領域を超えた情報交換の場〕、〔学生理解を深める場〕、〔教員のストレスやジレンマを解消できること〕、〔看護教育への意欲向上〕の5つがあげられた。領域を超えて情報交換を行うことは、要改善点の中でも要望として記述があり、すべての年度で意見があげられていた。

3. 全体討議について

全体討議では、表5-1に示しているように、大分類で見ると良かった、有意義だった項目の中で、ほぼ毎年度記載された記述内容は【情報共有の機会になった】【学びを深化・拡大できた】【講師、ファシリテーターのコメントにより活力を得た】であった。一方、要改善点としてほぼ毎年度記載された記述内容は、大分類でみると、【研修のテーマ・内容】【研修方法】【研修対象者】【発表の目的・内容・方法・時間】【全体討議の時間・内容・方法】【開催時期と回数】【その他】であった。【研修のテーマ・内容】は、平成18年度までは〔実習における教授方法と評価〕、〔その他〕に多く意見があげられていたが、平成20・21年度は、〔学内教職員間の連携・情報交換〕に多く意見があげられていた。

表 4-1

グループワークについて

〈良かった、有意義だったと評価された記述内容の分類〉

大分類	小分類	記 述 内 容 の 例	16 年度	17 年度	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度
情報共有の 機会になっ た	実習におけ る具体的 指導方法を 得た	他の教員と情報を交換することで自分の経験に共感して頂くことができ、他の教員がどのように対応しているかを聞けて、来年度の指導の参考にできるのでとてもよかった。						○
		各自が悩んだりしていた事例やその対策がわかって次の実習に活用したい。					○	
		来年度の指導にいかしたい。					○	
		具体的な勉強方法、学生への言葉かけをアドバイスをもらい、勉強になった。					○	
	領域を超え た情報交換 の場が有意 義である	メンバーからいろいろな意見が出され有意義だった。						○
		各領域の事例を用い、先生方からアドバイスをもらって有意義だった。					○	
		他領域の実習の様子やそれぞれの教員の困りごとがみえ、共通する部分を知ることができ意味があった。		○			○	
	学生の理解 を深める場 になる	様々な事例を聞くことができ、学生の状況を聞くことができよかった。					○	
		それぞれの領域で共通の学生を担当していることもあり、具体的に意見交換することができた。					○	
		指導困難な学生は大抵共通であり、教員により視点も異なるが、情報共有が必要ではないかと思った。						○
		それぞれの教員が共通して抱えていた問題や課題について話し合うことができたので勉強になった。					○	
	教員のスト レスやジレ ンマの解消	自分が指導上悩んだ事例に対して、アドバイスをもらい、こうすればよかったなど考えられて、うれしくまたすっきりした。					○	
		いろいろな事例があることやベテランの先生にも悩むことがあることを知り、励みになった。					○	
		話ただけでもストレスが緩和された。						○
		楽しかった。		○				
	看護教育へ の意欲向上	看護教育についてもっと学びたいという気持ちが湧いた。					○	
適 切 な グ ループワ ークの運 営	ファシリ テーター	話やすい雰囲気でファシリテーターも共感を持って聞いてくれて、助言をもらいとても有意義だった。						○
		ファシリテーターの先生方の支援もあり、率直に話し合えた。					○	
	メンバーの 組合わせ	人数が適切であった。	○					
		他領域間で情報交換を行うことは大変有意義であった。						○
		実習委員の参加により、他領域の方針を聞いたり、別な角度から考える機会を得た。	○					
	所要時間	時間が適切であった。	○					

グループワークに対するアンケート記述なし

グループワークに対するアンケート記述なし

表4-2

グループワークについて

(要改善点として記述された内容の分類)

大分類	小分類	記述内容の例	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
グループ運営	メンバーの組み合わせ	ふだん関わりの少ない領域の助手と話し合えるようグループ編成を考慮して頂けるとうれしい。	○		アンケート記述なし	アンケート記述なし		
		メンバーの人数がもう少し多い方(5-6人)が活発な意見交換ができる。		○				○
	テーマを設定した方がよい	事例の活用方法については、もう少し具体的に提示した方がよい。事例がバラバラ。		○				
		テーマ自由でよいと思う反面、各グループが同じテーマで事例を出し合って検討するのもよいのではないか。						○
		共通理解が難しい内容もあり、不全感が残った。	○					
研修開催の時期、時間	開催時期を実習期間中にしてほしい	実習中からこのような交流があると実習中の教員のストレス軽減や悩みの解消につながるのではないか。			アンケート記述なし	アンケート記述なし		○
		実習期間中にあったらよかった。						
	所要時間	時間が不足気味であった。	○	○				
		時間がやや長すぎた。	○					

表5-1

全体討議を通じて

(良かった、有意義だったと評価された記述内容の分類)

大分類	小分類	記述内容の例	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
情報共有の機会になった	他のグループや他領域の現状が理解でき情報の共有ができる	他のグループで話し合われた内容がわかる。	○					
		他領域の実習状況を知る機会ともなった。		○				
		他領域の教育の現状がわかり参考になった。				○		
		グループで話し合われた内容がよくわかった。					○	
		情報を共有できてよかった。						○
学びを深化・拡大できた	様々な視点から考える機会になり、学びを深めることができた	他のグループの発表を聞くことで、様々な角度からテーマについて学びを深めることができた。		○				
		自分があげた問題点や課題について視点を変えて考えることが出来た。			○			
		各領域でフィジカルアセスメントに対する認識も多少違っており、教員がその都度どう関わっていけばよいかなど考えることができ、有意義なものだった。				○		
		発表された内容はグループごとに異なっているので、研修を深めることができた。					○	
		各グループ、さまざまな視点から討議されており、学びを深める機会となった。						○
		貴重な機会となった 企画して頂いたことに感謝する。	○					
講師、ファシリテーターのコメントにより活力を得た	講師の講評・助言による有効な示唆・活力を得た	外来講師から講評を頂き、さらに深めることが出来た。		○				
		質問に丁寧に答えていただき今後の実習指導に示唆が得られた。			○			
		講師の○○先生のコメントで、実際の実習指導でどのように行っているか少しでもわかったことがよかった。				○		
構成・形式が適切だった	構成が適切	講師の先生から、さらにアドバイスをいただけたので、グループワークの意義を確認することができた。						○
		今年度の構成の方が時間が有効に使えてよい。		○				
	形式が適切	構成はこのままで良い。						○
時間配分が適切だった		形式はこのままで良い。						○
時間配分が適切だった		時間配分が適切であった。		○				
発表機器の活用だった		OH Cが使えたこと。	○					
開催時期が適切だった		実習を振り返る時期でもあり、適当であった。	○					

表 5-2

全体討議を通じて

〈要改善点として記述された内容の分類〉

大分類	小分類	記 述 内 容 の 例	16 年度	17 年度	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度
研修のテーマ・内容	学生に関わる各教員や臨地指導者の役割	教員の役割等に関する教育講演や講習会等	○					
		「ファカルティと助手の役割のすみわけ」「病院指導者と助手の役割のすみわけ」に関心がある。	○					
		看護学実習における教授活動や教員の役割に関する講義						○
	学内教職員間の連携・情報交換	今年度は、たくさんの学生が学生相談室を利用したと聞いています。実習に関係するところもあると思うので、学内での連携について考えるようなテーマ等を希望する。			○			
		今後学生指導で悩むことが多いと思うので指導教員（助教）と評価責任教員（講師以上の教員）が連携を取り合っていけるような関係作りについて話し合っていければ良いと思った。						○
		各領域ごとの達成目標は異なるが、領域間やファカルティとの情報交換を行いながら、学生指導を行う必要がある。					○	
		困難な事例や悩んでいることの情報交換ができることは有意義である。					○	
		領域間の意見交換のような機会があると、今までより学生を理解して実習指導ができると思う。					○	
	実習における教授方法と評価	学部全体の実習に対する活動等の情報が欲しい。	○					
		看護学実習における教授活動や教員の役割に関する講義						○
		教育方法、指導のあり方、学生との関わり方（教育的支援）に関する教育講演や講習会等	○					
		教員が学生との関わりを振り返る、指導方法を客観的に評価できるような方法について		○				
		基礎実習について話し合いたい。	○					
	本学における実習上の課題	宮城大学の現在の実習における課題を取り上げるような研修ではなかったので、それならば各々、自分の関心のある外部の研修に参加する方法でよいと思う。			○			
	教員のメンタルヘルス	教員のメンタルヘルスについて勉強会をしてほしい。				○		
		教員のメンタルヘルスについて引き続きやってほしい。いろいろな学生がおり、緊張張り詰めた状態で実習指導を行っているので教員自身が癒される研修会をお願いしたいと思った。						○
		今回は教員のメンタルヘルスについて、他の職種の視点からの講義であったが実際に他の看護学校での教員のメンタルヘルスに関する取り組みについて知りたい。						○
	その他	文科省の報告書による「到達目標」の解説及び宮城大としての解釈と今後の方向性等について、全体で共有したい。	○					
		新カリキュラムになったの評価が必要	○					
		「勤務していない施設の対象をケアすることの法的な責任について」に関心がある。	○					
		ケアリングについて		○				
		セルフマネジメントについて		○				
		全領域に共通する最新の情報等に関するファカルティや外部講師による講演等	○					
		「具体的な事例」		○				

大分類	小分類	記 述 内 容 の 例	16 年度	17 年度	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度
研修のテーマ・内容	その他	他大学での実習指導の現状・課題とその対応を希望					○	
		「実習支援のためのシステムづくり」		○				
研修方法	講演会・講習会・講義	教育方法、指導のあり方、学生との関わり方（教育的支援）に関する教育講演や講習会等。	○					
		講演の開催。		○				
		教育方法、指導のあり方、学生との関わり方（教育的支援）に関する教育講演や講習会等。	○					
		看護学実習における教授活動や教員の役割に関する講義。						○
		テーマを決めてトレーニングする。		○				
	ランチョンセミナー	実習中に実施するのであればランチをしながら、お茶を飲みながら気軽に参加できるものがよい。			○			○
	参加型研修	講師の先生の意見をたくさん聞くことができてよかったが、グループに分かれて参加型の時間もあるとよかった。			○			
		今回と同じような内容（カウンセラーの講義、グループワーク）を希望。					○	
研修講師	学内のファカルティ	学部内の他の先生方の意見や考えをお聴きする機会があると良いと思った。			○			
		指導教員の役割と臨床指導者の役割についても学内の教員から聞いてもいいのではないかと考えた。						○
		ファカルティによる具体的指導方法（スキル・メソッドレベル）の教示（学部教育では、ファカルティとインストラクターは役割分担が異なり、ファカルティはインストラクターのロールモデルではない現実があるため）。	○					
		「助手中心」となるため、あまり有意義に思えない。単位認定者の意見考察を伺いたい。		○				
	同じ外来講師の継続	同外来講師の講義の継続。		○				
		可能であれば、今後も同じ外来をお招きし、継続していただきたい。			○			
	同じ外来講師は不適切	昨年と参加者がほぼ同じで、2年続けて同じ講師の先生に来ていただくのは、あまり良くなかったと思う。			○			
研修対象者	研修対象者の焦点化	助手、単位認定者。学生。単位認定者、大学。施設などに焦点を当てた研修。		○				
	看護系の全教員	看護専門科目担当教員全てが対象になった方がよい。	○					
		この研修会の対象である「実習指導教員」というのは、現在の助手（来年度は助教も）を指しているのか。ファカルティも単位認定者であり、協力して実習指導を行なっている点から、課題を出したり、レポートを書くのが主に助手だけだということに少し違和感を感じる。ファカルティと共に考えていける場であるとよいと思う。			○			
		指導教員は最後までいてほしいと思った。						○
	実習施設の指導者や関係者	実習施設の指導者、他関係者の方も講演会（外来講師）に参加できるとよいと思った。			○			
		臨地指導者を招き、本学の指導、大学教育について理解をいただけるよう共通認識を有するための研修会。		○				

※2つの分類に重複して使用している記述は、分類の内容を表している部分に下線を引いた。

大分類	小分類	記 述 内 容 の 例	16 年度	17 年度	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度
研修対象者	学生相談室の吸引	学生相談にのっている学生相談室の先生も参加していただき、意見交換ができたよかった。						
グループ編成	助教同士の研修	とても意義のある研修会だったが、毎年同じようなスタイルなところは少々助教同士が力を抜いて話し合える場になると良いのかもしれないと感じた。						○
	教員経験年数別のグループ編成	経験豊富な先生にととのグループワークは、後輩に教えるばかりで、あまり参考にならない気もした。年数によっても必要とする研修は異なるのではないかと少し思った。						○
発表の目的・内容・方法・時間	発表目的の明確化	発表目的・発表内容が不明確	○					
	テーマ毎の発表	テーマごとの発表の方が聞きやすい。	○					
	情報機器活用 の発表	パワーポイントが使えるとより共有できる。	○					
		話し合われたポイントだけでもプロジェクター等で提示したほうがよい。					○	
	発表内容の 具現化	各グループの事例がわからないため、まとめのみをきいても理解しにくかった。		○				
		要約なので、具体的なイメージがしにくい。					○	
		もう少し、グループでできた事例を聞きたかった。						○
	発表時間の適正化	1人1分程度のスピーチでもよい。	○					
全体討議の 時間・内容・ 方法	全体討議の 時間の確保	ディスカッションの時間がもう少し欲しい	○					
		発表内容を基にした全体討論があると、各教員の共通理解が深まる。		○				
		各領域の持ち時間が7分弱と短い時間の中では、各領域から出されたテーマについてコメントを頂くのみで、ディスカッションの時間確保は難しいと思った。			○			
	全体討議の 内容・方法 の適正化	内容と時間、教室の使い方だとディスカッションを行うのは難しいと思う。他の教員が発言しずらく、コミュニケーションは一方向になりがちだと思う。			○			
		グループワークの結果を発表するだけでは、今回のようなテーマでは物足りない感じがした。						○
		形式的であった。一般的なところで終わってしまった。	○					
		深めていくことや、生かしていくような場であればよかった。					○	
		もし時間があれば、グループ分けをして「テーマについてディスカッション」→「発表」→「先生からの助言」の形式で行なってもいいのではと思った。			○			
	資料確認時間の確保	資料全体を確認できる時間があつた方がよい。	○					
	講師との時間の確保	講師と直接話す時間が欲しかった。		○				
	論評の時間の確保	もう少し詳しく論評を頂ける時間が欲しかった。		○				
	外来講師の講義時間の延長	せっかく遠方からいらして頂いているため、もっとお話を伺えたらと思った。				○		
	課題整理の時間の確保	共通の問題に対して、課題を整理する時間があつたらもっとよかったと思う。						○
開催の時期 と回数	開催時期	実習開始前の方がスキル・メソッドの習得として有効	○					
		領域実習前にこのような研修会をしていただけるとより実習指導に生かすことができるのではないかと感じた為、研修会の開催時期について検討していただければと思う。						○

大分類	小分類	記 述 内 容 の 例	16 年度	17 年度	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度
開催の時期 と回数	開催時期	11月末の学期内に行った方がタイムリー		○				
		実習中（例えばインターバル）の開催を希望					○	
		インターバルの時期や冬休み終了後に期間があるならその時期に 設定できるとよい。						○
		実習期間中（インターバル中等）、負担にならない程度で昼食時な ど、情報交換できる機会があればよいと思う。						○
		年度末では日程的に良くないと思う。			○			
		時間と予算の制約はあるが、年に一回ではなく、前期を活用して、 系統立てて研修会があると良い。			○			
	開催曜日	できれば土日をさけてほしい。		○				
	開催回数	F Dの開催に合わせて実習前にもう1回あるとよい。	○					
研 修 の 方 法・回数 の 決定方法	助手会の意 見を反映し た研修企画	実習委員会が全面的に企画するのではなく、年度の初めくらいに どのような研修を行いたいのか、助手会などで話し合ってみてはど うか。年1回でいいのかも含めて。		○				
提出資料の時期	提出資料の延期	資料作成時期をもう少し延ばして欲しい。	○					
研 修 後 の フォロー	研 修 後 の フィードバック	研修会を踏まえた今後の見通しや方針を示して欲しい、フィード バックが欲しい。	○					
関連図書 の提示	研修前の関 連図書の提 示	事前の図書の提示は、当初は量的には多いように感じられた。し かし、全て通読してみると、大変勉強になった。次回以降も、 図書の提示を是非行っていただきたい。			○			
その他		8月のF Dもあるので、報告書をまとめる形の研修会は不要。					○	
		実習において、大学として何を教えればよいのかを明確にして欲 しい。	○					
		各個人の研修に希望する内容は異なっているので、負担感が強い。					○	
		宮城大学看護学部の自習指導として、ケアリングを本格的に取り 入れていく方針なのか確認したい。			○			
		インストラクターが連携を取ることで、学生の学びが広がる。					○	
		改めて看護教育を考える良い機会。					○	
		新しい助教にとっては今回の研修はとても参考になった。						○
		年度末の忙しい時期であるが、一年の実習全体を振り返る場とし ても必要かもしれないと感じた。						○
		グループワークが長引いてしまい、途中からの参加だったため、 他のグループの発表があまり聞けなかった。		○				
		実習中、学生に一番近い立場にいる助手の意見をもっと取り入れ て欲しい、それが無理であるならその理由を周知して欲しい。	○					

※2つの分類に重複して使用している記述は、分類の内容を表している部分に下線を引いた。

考 察

1. 講演について

講演については、実習指導に役立つ内容で、新しい知識を得られること、資料や内容など講演方法が適切であることが重要であることが示唆された。講演に改善を求めている内容は、「具体的な指導方法を知りたい」、「新しい知識を得たい」で、良かった点および改善点の双方に、これらの意見が出されていたことから、研修に参加する教員の経験年数の違いにより、企画した講演内容の中には受講した助教にとって既知の内容もあったと考える。また、対象である助教の持つ知識や経験にはばらつきがあり、個別にニーズが異なっている可能性も考えられる。本研究では、記述内容の量的な検討は行っていないことから、どの程度の割合でそのようなニーズが高いかどうかは定かではないが、今後の研修においても、できるだけ多くの対象である助教が新しい知識を獲得し、指導方法のスキルアップを図れるような企画を行っていくことが必要である。

2. グループワークについて

グループワークは、各教員間の情報共有の場として重要な役割を果たしていることが明らかである。情報共有のニーズは高く、情報の共有を行うことができた場合は有意義な研修会と捉えられている。一方、毎年度実習指導教員研修会を開催し、グループワークを実施していても、毎年各教員間の情報共有の機会に対する要望があがっていることについては、研修会の回数に関する検討という視点のみならず、助教が各領域間の助教やファカルティとさらにコミュニケーションをとることや、情報共有を図る機会と方法に関する検討が必要であることが示唆された。

グループワークは、助教にとって実習における具体的な指導方法に関するスキルアップの場、領域を超えた情報収集とコミュニケーションの場、学生理解を深める場、教員のストレスやジレンマを解消できる癒しの場、看護教育へのモチベーション向上の場と幅広い意義を持つ場となっており、多くのものを得ていることから、研修会には欠かせないプログラムであると考えられる。今後

も継続して効果的にグループワークを企画していくことが必要である。

グループワークにおけるグループ編成は、これまで新任と教育経験豊富な教員とを混在してきたが、教育経験別による編成を試みるかどうか検討が必要である。グループ編成の数については、年度末の実施では退職者や欠席者もゼロではなく、編成バランスは毎年課題となる。グループ人数が少ないと活発な意見交換が難しいという意見もあるが、多すぎることは同じ問題を招くことが推察される。一方で、同一領域の教員数が多い場合や毎年組まれる過去のグループ編成を考慮しない場合は、同じような顔ぶれとなり普段交流の少ない領域との新たな情報共有という点で課題が出るという意見もあり、過去のグループ編成を考慮したうえでのバランスが必要であると思われる。

3. 全体討議を通じて

全体討議は、良い点としては情報共有の機会になり、学びを深化・拡大でき、講師、ファシリテーターのコメントによりモチベーションが高まることであった。一方、全体討議を通じて、研修会の企画やあり方をはじめ幅広い意見内容記述があり、多くの課題について検討する必要性が以下のように示唆された。

(1) 企画について

研修会の企画については、毎年同様の意見の反復や様々な意見がみとめられた。この理由として、幅広いニーズがあることのほか、残された問題が解決されていないこと、あるいは、検討や解決されていないという認識があることが要因にあることが考えられる。実習指導教員研修会は、毎年アンケート結果をもとに各領域のニーズを再度擦り合わせて実習委員会で企画されるが、その検討過程や議論の結果について、実習委員会では共有されているものの、助教にまで広く十分に理解されていないことも理由であると考えられる。例えば、研修のテーマや内容についても、毎年行われるFD (Faculty Development、以下FDとする) 企画とのバランスをとるなどし、最終的に検討を重ねてテーマを絞っていくことが必要である。

開催時期についても、学内行事等との兼ね合いで開催時期も限定されるなどやむを得ない場合もある。これら検討過程と決定根拠や理由も、実習委員会内での風通しは良くても、領域への伝達がうまくいっていないために助教まで届かず共通認識が得られていない可能性もある。

今後は、研修会の場合、教授会の場合等でも企画に関する検討過程、開催時期の理由などについて説明を行い、参加する助教とこれまで以上に共通理解をはかり、風通しを良くしていくことが必要である。

またこれまで、次年度の実習指導教員研修会の企画は、テーマを含めアンケート結果に基づいて行われてきた。これを基本線にするかどうかについても、今後検討が必要である。

ニーズに寄り添った企画を目指し、平成18年度は助手会（現、助教のみで組織した会。）で希望企画を検討してもらい、実習委員会と連携してテーマを検討したが、最終的な審議プロセスは実習委員会、例年と同様の検討過程ルートに則って行われたため、アンケート調査に基づいた審議過程と大きな違いがなかったため、その後はまたアンケート結果をもとに検討するスタイルが継続されてきた。アンケート結果と企画する時期に大きな時期的な差がある場合は、再度ニーズがタイムリーなものであるかどうか検討が必要である。しかし、企画段階から助教の大きな負担とならないよう配慮することも必要である。一方、実習指導教員研修会の企画運営が実習委員会の役割として継続されてきたことについての意義や課題に関する評価も今後積み重ね、検討を行っていくことも必要である。

（2）研修方法について

研修方法については、学内外の講師による講義→グループワーク→グループ発表→全体討議の形式が基本的形式であり、賛同が得られていた。平成18年度においては、新たな試みとして、グループワークを実施しなかったが、同年度のアンケート結果ではグループワークを実施してほしいという要望があがっていた。本研究では、グループワークの意義は高いことや、研修方法として助教は参加型の研修を望んでいることが

示唆される。したがって、基本的にはこれまでの形式・構成を継続していく方向で良いと考える。但し、全体討議の時間の確保など研修時間配分などにさらに工夫が必要であり、またファシリテーター（指導教官）の参加の要望が多いことから、実習指導教員研修会は、助教のみが参加するというものではなく、ファカルティも参加し、助教の抱える課題をその場で共に理解し、助教をエンパワーすることが求められているといえる。

（3）研修時期について

研修時期は、これまで3月開催が振り返りとして適切とする意見の一方、実習のインターバル、領域別実習の前、FDの時期、実習中の昼休みなどの開催を望むものがあり、検討してきたが、全領域が同時期にインターバルを取ることが難しく、結果として3月に位置付けてきた経緯がある。平成22年度には再検討して、FDの時期（1日他の学部のFD日）で、かつ領域別実習の前に位置付けた。実施してどうであったか評価し、研修会開催時期については継続して検討する必要がある。

（4）研修対象について

研修対象は、平成15年から始めた本研修は、その対象が必ずしも明確ではなかったが、報告書からは助手、助教を対象にしてきたことは明らかであった。そこで平成22年度において、本研修の対象を助教とすることについて、実習委員会を通じて教授会で確認した。しかし、全教員の研修にする必要性の指摘もあることから、教員の今後の意向を確認して研修対象を拡大するか否か検討が必要である。

（5）研修後のフォローアップについて

研修後、グループ毎にグループ討議の内容をまとめること、終了後にアンケートを実施して評価し、報告書として作成して実習指導に関わる全教員に配付し、次年度の企画につなげてきたが、研修後のフォローアップとしては、個々の教員にゆだねられているのが現状である。例えば実習指導教員ひとりひとり対して具体的対応を組織的に実施する必要があるかどうかまでの詳細な検討や実施には確かに至っていない。

研修後の課題は個別に活用すべきものと組織的に改善するものに分類し、それぞれに必要な措置が取られ、組織全体の教育的好循環を構築する必要がある。学部全体あるいは各領域の教授を中心とした具体的な取り組みに繋げるなど、組織的に実現できるよう、実効性のあるシステムを構築する必要性に関する検討も必要である。

4. 実習指導教員研修会報告書について

実習指導教員研修会報告書は、アンケート集計結果を要約されたものが多く見受けられた。それゆえ、過去の報告書から実際の回答実数から量的傾向を分析することや、回答表現の詳細を検討することは追跡が困難であったことが課題としてあげられる。今後は、回答者に不利益にならないよう、これまで同様、倫理的配慮を行った上でアンケートを実施しつつ、このデータについても電子データとして残し、データの保存や引き継ぎの整備を行うことが必要である。

報告書にて報告される研修会終了後アンケートの内容は「テーマについて」「講演について」「グループワークについて」「全体討議について（全体発表会について）」「今後の研修会に関する希望・要望」についてはほぼ毎年踏襲されて実施されている。毎年同じアンケート項目を継続して蓄積していくことで、中・長期的な評価や検討が可能となるという点からも、今後もアンケート内容については核となる統一した項目は変えずに実施していくことが望ましいと考える。

一方、アンケートは参加者に広く配付されていることから、回答者は、必ずしも助教だけではないことから、助教独自のニーズとファカルティのニーズをそれぞれ分析・検討することができるとい点からも、回答者が特定されない方法で、回答者の背景（立場や役割など）についても項目として入れ、必要がある。

また研修会参加や報告書作成を負担とする意見がアンケート結果に見受けられた点から、参加者が参加に受け身とならない工夫として、助教の企画段階からのコミットメント、報告書作成の意義について啓発していくこと、これまで通り負担と

ならない程度の、しかし今後の研修会の在り方を検討するのに過不足ない情報を含めた報告書作成を継続していくことが必要である。

また数年ごとに報告書を定期的に分析し、結果を学内教育連携のシステム改善等に還元し、集まって話し合った課題改善や成果を目に見える形で共有し、実感していくことが必要があると考え。また一方は、研修会に積極的に参加し、司会、発表や報告書作成担当書記など研修会のグループ内で役割を担った場合はなんらかの評価の対象としポイントとするなどの、新たな試みや検討も今後必要となる可能性がある。

結 語

本学の実習指導教員研修会の在り方は、1) 講演は、新しい知識や具体的な指導方法を得られるものとする、2) グループワークは、情報共有のみならず多面的に意義ある場となっており、グループ編成を工夫して継続することが重要であること、3) ニーズにより添った企画を目指し、開催時期を今後も検討し評価すること、企画決定プロセスを含めて助教と共有すること、4) 助教が主な対象であるが、ファカルティも参加し、助教の抱える課題を研修の場で共有し、助教をエンパワーすることが求められていること、5) 研修後の課題は個別に振り返り参考にすべきものと組織的に改善するものに分類し、組織全体の教育的好循環を検討する必要がある、6) 研修会後アンケートは核となる項目は毎年継続してとり、その結果は、データを電子データとして保存し管理する必要がある、研修会報告書作成は継続し中・長期的に評価検討していく必要がある。

文 献

- 1) 首都大学東京健康福祉学部・人間健康科学研究科：自己評価書，平成22年3月。
- 2) 独協医科大学看護学部：独協医科大学看護学部自己点検・評価報告書，平成21年10月。
- 3) 椎葉美千代，齋藤ひさ子，福澤雪子：看護学実習における実習指導者と教員の協働に影響する要因，産業医科大学雑誌，32（2）：161－176，2010。

- 4) 泊 祐子, 栗田孝子, 田中克子: 臨地実習指導者の指導経験による"指導のとらえ方"の変化と必要な支援の検討, 岐阜県立看護大学紀要, 10 (2): 51-57, 2010.
- 5) 阿部オリエ: 看護学実習における評価に関する文献検討, 日本赤十字九州国際看護大学 intramural research report, 第7号: 51-56, 2009.
- 6) 永田真弓, 高島尚美, 大賀明子, 他: 経験型臨地実習指導者研修会への参加による臨地実習教育に関する主体性の育成, 横浜看護学雑誌, 2 (1): 41-47, 2009.
- 7) 米田照美, 前川直美, 沖野良枝, 他: 実習指導者講習会が指導者の役割遂行に及ぼした影響, 人間看護学研究, 6 (6): 77-90, 2008.
- 8) 富田幸江, 仙田志津代: 実習指導者の学生時代の実習体験の振り返りと実習指導のあり方への認識: 指導者にとって実習体験を振り返ることの意味, つくば国際短期大学紀要, 通号34: 135-145, 2006.
- 9) 原田広枝: 看護実践施設と看護学校の連携に関する研究: 看護学校文化と実習指導者文化の現状と関連, 九州大学教育経営学研究紀要, 第7号: 17-28, 2004.
- 10) 舟越和代, 斉藤静代, 吉本知恵, 他: 臨地実習における実習指導者の指導に関する意識, 香川県立医療短期大学紀要, 第5巻: 59-68, 2003.
- 11) 太田浩子, 土井英子, 金山時恵他: 臨地実習指導者および教員のリスクマネジメント研修会の報告: 3年間の臨地実習施設連絡会議より, 新見公立短期大学紀要, 第24巻: 201-205, 2003.
- 12) 福山なおみ, 真部昌子, 廣瀬信子, 他: 平成12年度臨床実習指導者講習会直後の受講生の意識, 川崎市立看護短期大学紀要, 8 (1): 43-50, 2003.
- 13) 原田広枝: 臨地実習における「看護学校と実践の場」の連携に関する研究: コミュニケーションと対等性の検討, 九州大学教育経営学研究紀要, 第6号: 39-46, 2003.
- 14) 渡部洋子, 相馬朝江, 赤松弥生, 他: 臨地実習指導における教員の教育的省察: 看護教員の实習指導能力向上への取り組み, 上武大学看護学部紀要, 第4巻: 47-55, 2008.
- 15) 原田秀子: 臨地実習における学生の達成感に影響する要因の分析 (第3報): 4年次学生に対しての縦断調査を通して, 山口県立大学看護学部紀要, 第10号: 29-37, 2006.
- 16) 北林 司, 矢嶋和江, 秋山美加, 他: 成人看護学実習における看護学生の満足感を構成する要素の分析, 群馬パース学園短期大学紀要, 6 (1): 21-27, 2004.
- 17) 宮谷 恵, 安田真美, 米倉摩弥, 他: 本学部における「学生による臨地実習評価」の方法の開発経過, 聖隷クリストファー大学看護学部紀要, 第12号: 163-173, 2004.
- 18) 原田秀子: 臨地実習における看護学生の達成感に影響する要因の検討, 山口県立大学看護学部紀要, 第8号: 93-98, 2003.
- 19) 小川妙子: 研究と経験が支える看護学実習の展開, 看護教育学研究, 11 (1): 1-11, 2002.
- 20) 塩川華子, 中島五十鈴, 青井聡美, 他: 臨地実習の学びをより促進させる教員の関わり方: 基礎看護学実習I終了後のアンケート調査から, 広島県立保健福祉大学誌人間と科学, 2 (1): 53-63, 2002.
- 21) 松本幸子, 吉田恵理子, 高比良祥子, 他: 実習指導者が考える「臨地実習で学生に学んでほしいことは何か」, 県立長崎シーボルト大学看護栄養学部紀要, 第2巻: 85-91, 2002.
- 22) 江川幸二, 雄西智恵美, 小島善和, 他: 看護学生の臨床実習における戸惑いとその要因, 東海大学健康科学部紀要, 第7号: 1-8, 2001.
- 23) 田原幸子, 溝口満子, 竹内佐知恵, 他: 「保健婦・士」「助産婦」「看護婦・士」実習指導者: 講習会修了受講者の動向と講習会の効果, 東海大学健康科学部紀要, 第6号: 87-92, 2000.
- 24) 水戸美津子, 上岡澄子: 「死の転帰をとった患者」を受け持った看護学生の実習指導 (人間科学編), 千葉県立衛生短期大学紀要, 2 (1): 85-88, 1983.
- 25) 前掲2)